

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 31 日現在

機関番号：13301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16427

研究課題名(和文) エスノグラフィーを用いた体育授業における教師の省察的実践の特質に関する研究

研究課題名(英文) Ethnographic Study on Teacher's Reflection in Physical Education

研究代表者

横山 剛士 (Yokoyama, Takeshi)

金沢大学・学校教育系・准教授

研究者番号：30567904

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、体育授業における教師の省察の特質を検討した。分析の結果は、以下の通りである。体育授業における教師の省察の特質として、第一に、教師の省察は、教師の過去の経験とつながっており、授業の難しさを制御していることが明らかになり、第二に、教師の省察は、教員間の相互的關係によって促進することが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study was examined the teacher's reflection in Physical Education. The results may be summarized as follows: As a characteristic of the teacher's reflection, (1) teacher's reflection in the physical education practice was linked to the teacher's past experiences in physical education. (2) Teacher's reflections were promoted by interaction among teachers.

研究分野：体育科教育学

キーワード：体育授業 教師の省察

1. 研究開始当初の背景

今日、学校教育課題の複雑化・多様化が指摘されており、それに対応できる「学び続ける教師」が求められている（文部科学省、2012）。研究においても、授業とは教師が予め計画していたとしても予期しないことが起こり得るのであり、授業内の偶発性をうまくコントロールできるかどうかは授業の良しあしを規定するという、教師の省察的実践の重要性が認識されている。こうした教育実践の難しさ（複雑性）は、体育授業においても例外ではない。特に体育は、グラウンドや体育館など大きな空間で秩序を形成してコントロールしなければ学習が成り立たないことから、他教科よりも複雑性が高い。それに加え、子どもの学習の成果が、技能という子どもの出来／不出来に立ち現れやすいので、そうした目に見えやすい学習の様相が子どもの学習意欲に影響を及ぼすことも、教育実践の複雑性を高める要因となる。

2. 研究の目的

以上の問題意識から、本研究は、教師の体育授業実践を観察したり、教師に体育授業実践に関するインタビュー調査をすることを通じて、体育授業における教師の省察的実践の特質を解明することを目的とした。

具体的研究課題としては、第一に、ある教師の体育授業づくりを迫ることで、個人として体育授業の複雑性をどう制御しているのか（課題①）を、第二に、体育授業の改善を学校全体で取り組んでいる事例をもとに、組織として体育授業の複雑性をどう制御しているのか（課題②）を設定した。

3. 研究の方法

課題①については、ある教師がつくった体育授業（事前検討会－体育授業－事後検討会）に参加観察に入り、①学習指導案の作成時点での教師の予期と②体育授業中に起きるエピソードとそれへの教師の対応、③事後検討会における教師の気づきについてデータを収集した。

課題②については、体育授業の改善をテーマに据え、複数年にわたって校内研究に取り組んだ公立小学校を選定し、体育授業づくりに関するインタビュー調査を実施した。

4. 研究成果

【研究課題①】

研究課題①の研究課題では、M 教師がつくった小学校1年生「ボール投げゲーム」の授業の教材化、実施、振り返りの一連の過程の分析を通じて小学校体育授業における教師の省察の特質について考察した。以下、(1)教材化の過程と(2)事例の考察を記述する。

(1) 教材化の過程

M 教師が取り組んだボールゲームの技能について『学習指導要領解説』第一学年及び第

二学年の目標及び内容には、次のことが記されている。

(1)ア ボールゲームでは、簡単なボール操作やボールを持たないときの動きによって、的に当てるゲームや攻めと守りのあるゲームをすること。

そして、「ボール投げゲーム」では次のようなゲームをすることが記されている。

(7)物やマークなどの的に向かってボールを投げたり蹴ったりする目的のボール遊びで、個人対個人、集団対集団で競争するゲームである。

また、態度では、「運動に進んで取り組み、決まりを守り仲良く運動したり、勝敗を受け入れたり、場の安全に気をつけたりすることができるようにする」が、思考・判断では、「簡単な規則を工夫したり、攻め方を決めたりすることができるようにする」が記されている。

M 教諭は、これらを念頭に置きながら4時間の単元を構成し単元のねらいを「きまりを守って仲間と仲良くゲームを楽しむ中で、狙ったところにボールを投げたり、力強いボールを投げたりすることを実感できる楽しさ」を獲得させることとし、技能面で「狙って」と「力強く」という観点を挿入し教材化を試みた。

M 教諭のこの授業案について、2015年6月に校内の事前検討会が行われている。ここでは、司会者の教諭のもと、まず授業者であるM 教諭から授業のねらいや展開、子どもたちが取り組むゲームのルールの説明が行われた。その後、その説明に対して同僚教師たちから質疑を受け、応答するという形式がとられた。質疑応答の序盤は、児童が取り組むゲームのルールや方法の確認が行われている。中盤に差し掛かったとき、「狙って投げる」のねらいについて批判的な意見がだされた。

C 教師は、「学習指導要領に正しいフォームを身につけることが大切って書いてあるのか」と問い、「狙って投げる」ことをねらいにした意図を問いただしている。それに対してM 教諭は、学習指導要領解説には「書いていない」と認識しているけれども「高学年になったときに、ソフトボール投げとか体力テストしたときに投げられない、フォームがでないっていう実態もいろいろな学校でみてきて、1年生のときから経験させたい」と授業に込めた思いを伝えている。また、「狙う」と「力強く」投げることについて子どもたち同士が話し合う場面を構想するものの、管理職であるA 氏から「技能面を話し合うことは、低学年のマルマル遊びの思考、判断面ではないんだよね」と指摘される。しかし、こうした指摘がなされながらもM 教師は「狙う」と「力強く」のねらいにこだわり授業を構想、実践していく。

(2) 事例の考察

「壁や制度と格闘しながらも、新しい授業を

模索し創造しているのが、現在の先生の一つの姿」(秋田、1997)であるならば、M教諭もその一人といえよう。教材化における相互作用から教師の省察について次のような特徴が浮かびあがってくる。

M教師のねらいに込めた思い

①過去の教育経験から、現在の児童の実態を問題化し、そこらか教材を創っていく。

学習指導要領解説ボール投げゲームについて「狙って」投げるや「力強く」投げるとの観点は示されていないものの、M教師は構想し、採用している。その理由は、高学年の児童はボールが投げられないというこれまでの教育経験で抽出された技能面に対する問題認識から「1年生のときから経験させたい」という思いが湧いたからである。教材化は、目の前にいる児童への課題意識だけでなく、過去の教育経験から引き出された技能面に対する認識の影響も受けている。

②体育授業の自律的改善の源泉としての挑戦性

同僚教師から忌憚のない意見がありながら、M教師はそれらを取り入れる形で修正することはしていない。これは、上司である管理職や同僚教師がメンターとして機能しなかったことを意味するのではなく、それを超えるM教師の挑戦性の表れとして捉えることができる。知識や経験の伝達がなされていない場合でも、教師の挑戦性とも言うべき志向性は体育授業の自律的改善の源泉になりうると思われる。

【研究課題②】

研究課題②では、体育授業の改善をテーマに据え、複数年にわたって校内研究に取り組んだA小学校の事例を分析することで、組織的な体育授業研究が教師の省察の特質に及ぼす影響について指摘した。以下、(1)体育の授業研究過程と(2)教師の省察的実践の特徴を記述する。

(1) A小学校の体育授業研究過程

まず、事例校の研究経緯と学校体育経営における体育授業の研究過程について確認しておく。A小学校が、体育の研究に取り組むに至ったのは、研究開始以前、児童の学力の定着が遅れているばかりでなく、「授業が成り立たない」ほど荒れている状況であったことがある。学び方を身に付けさせ、授業の成立や学力定着へつなげていくことが目指されていたため、体育を「利用」することが意識された実践であった。26年度以降の研究主題には、そのことが端的にあらわれている。

A小学校において取り組まれたこととして、①技能を表現した「できる」だけではなく、「わかる」の思考・判断面、「かかわる」の態度面を包含したテーマを一貫して据えたこと、②そうしたテーマを学級経営や他教科へつなぐことを意識して研究を行っていたこと、③それを具体化するために、毎年の公開研究会の実施したり、④授業スタイルや体育ノートの定着等、授業の型の採用がある。

⑤Q-Uテストの実施等、体育授業の成果が、体育授業以外にどうでているのかの確認をしている。

(2) 教師の省察的実践の特徴

A小学校は、こうした実践を6年間積み重ねた。教師によって、研究への構えやかかわり、取り組んだ年数等が異なるので、そこでの学習も多様になる。以下、A小学校の教師の認識からみた学校の変化について、①体育的側面、②それ以外の側面に分け、見ていく。

①体育的側面

態度、思考・判断の保障

「できる」に加え「わかる」「かかわる」も主題に据えたことで、態度、思考・判断についての学習を保障することにつながっている。たとえば、これまで、運動量を確保することを重視していた教員も、体育ノートを活用し、児童の思考や言語活動の様子を把握して指導につなげている。

体育授業に関する教師の力量の保障

第二に、体育授業に関する教師の力量の保障につながっている。これには、2つの側面がある。一つは、授業パターンを形成することであり、二つ目に、そのことが、特に中学校・高等学校の保健体育科教員免許を有していない教員に対する授業観の揺さぶりにつながっていることである。

前者については、ホワイトボードで、めあての確認や児童に作戦を考えさせるなどしたり、タブレット端末を用いて児童自身に技の完成度を確認させるなどして、子どものわかりやかかわりを具体化する指導方法を定着させている。

後者について、たとえば、ある教師(中・高等学校の国語科教員免許状保有)は、「運動して、子どもたちに考えさせるところ」が「自分の中にはなく」、「とにかく運動させなきゃ」だったが、「めあてをもたせて振り返りとかをさせ」ることが「国語」や「算数」という授業だけでなく、「体育」でも有効なんだ」と認識変容を述べている。

②学校教育活動、学校組織への影響

A小学校は、当初から、体育授業の研究を通じて、授業の成立や学力定着の実現をねらっていた。この点についても、教師の認識や資料から、いくつかの変容が確認できる。

他の教科への授業スタイルの応用

まず、体育における授業スタイルが、他の教科でも活かされている。ある教師は、授業の「流れ」について、算数の「ウォーミングアップがあって、自力解決があって、全体で共有して、まとめをして、適用題をしてという流れ」が、「その時間の学びがちゃんとできているのか」というところまでも1度確かめる」という「『体育』の流れを汲んでいる」と述べている。また、こうした「流れ」は子どもにも内面化していると教師は感じており、授業の安定性につながっていると認識している。

八代（2002）は、「体育の授業が学校を変える」の実現の鍵は、組織学習にあると指摘した。本研究は、体育授業における教師の省察的実践は、他の教育活動におけるそれにつながる可能性を示唆しているといえる。

今後の課題は、授業の複雑さをどう制御するか、という観点ではなく、資質・能力の育成にどう寄与するのかといった観点から教師の省察的実践を理解、解明することである。

参考文献

秋田喜代美「中堅教師の成長と停滞を越えて」児童心理、pp.117-125、1997。

八代勉「体育の授業が学校を変える」『体育科教育』大修館書店、pp.10-13、2002年。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 2 件）

①横山剛士「体育授業に関する学校研究に取り組む小学校教師の学習過程—学校体育経営における組織ルーティンの機能—」日本体育・スポーツ経営学会第41回大会、2018年3月18日。

②横山剛士「小学校体育授業における教師の省察に関する研究—1年生「ボール投げゲーム」の事例分析—」日本体育・スポーツ経営学会第39回大会、2016年3月14日。

〔図書〕（計 1 件）

①柳沢和雄・清水紀宏・中西純司編著『よくわかるスポーツマネジメント』ミネルヴァ書房、2017年、pp.1-210、横山剛士「学校体育のカリキュラム・マネジメント」(pp.22-23), 「学校体育と学社連携／協働／スクール・ガバナンス」(pp.30-31)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

横山 剛士 (YOKOYAMA takeshi)

金沢大学・学校教育系・准教授

研究者番号：30567904